

芦安ファンクラブ通信

第18号
残暑号

NPO法人
芦安ファンクラブ
南アルプス市芦安
芦安 1589-8
事務局：(大滝)
055-288-2531

第十一回「南アルプス芦安登山教室」北岳で展開される。

九月十八日、十九日に第十一回「南アルプス芦安登山教室」が初秋の北岳で実施された。登山教室が生まれて六年目にしての北岳登山になった。常連参加者から「俺達はいつになったら北岳にいけるのか」そんな声はもうだいぶ前から聞こえていた。もったいぶっていた訳ではないが、やはり北岳は今までの登山教室の集大成であるべきだった。高低差一五〇〇メートルの初日の登り、林道通行規制の時間制限、いろいろなハードルに「参加者は出来るだけ絞り、スピード登山の形でなら可能」となった。連休の初日で混雑が予想される肩の小屋へ無心をし、座学の実施も可能になった。受付の南アルプス芦安山岳館や事務局の大滝は予想以上の申込や常連者の追加参加の対応に苦渋の判断を余儀なくされた。しかし結果的には数名のキャンセルにより希望者全員の登山が可能になった。座学はどんな内容にしようかと思索しているところへ芦安ファンクラブ会員最高齢者の清水百太郎氏が「俺もいけるようになったから頼むよ」渡りに船とはこの事で、座学の内容は芦安の案内人について語ってもらう事にした。清水氏の父又市は芦安案内人組合に所属し、案内人として活躍した。その証である

貴重な組合員手帳は唯一現存しており、南アルプス芦安山岳館に展示してある。清水氏は八〇歳になるが、八ツの赤岳へ真教寺尾根からの日帰り登山や北岳への集中登山などを精力的にこなしている「ツワモノ」である。参加者は三十八名、スタッフは十六名、になった。暗い朝もやの中、前泊された県外参加者や遠くからマイカーで駆けつけた県内参加者が集いはじめ、ライトスタンドの下で受付が進む。夜明けの西空は「今年こそは青空の下で爽快に」を、期待させるような好天だ。そういえば去年の鳳凰三山は台風で揺さぶられた前線による大雨だった。出発準備の広河原で「厳しいようですが、登る意思の無い方、こちらが無理と判断した方はその場から下山して頂きます」当会副会長の塩沢氏からゲキが飛ぶ。準備体操も真剣だ。不要なものや過多の食料などのチェックが行なわれた。「バテ」の原因の大半が持ち過ぎる重いザックだからだ。五班編成で対向者の通過も考慮し間隔は長めに空けて登り始める。各班のスタッフは歩き方の指導や、周辺の植物、山系のうんちくに余念が無いようだ。汗がにじんできた頃、参加者から登山靴のソールが剥れたとの事、早速テーピングを施す。御身でなくて幸いだ。このケースは最近頻繁に起こっている。入山前のチェックと事後処理の応急材は是非準備したい。大樺沢二俣に着く頃、北岳の山頂はガスで覆われはじめ、天気の下降を予測

させる。長い列にバイオトイレは活躍中だが、存在をもっと解り易く標示したい。ここから斜度が変わり険しい登りが小太郎稜線まで続く。夏には鮮やかに斜面を彩っていた花達の結実にほっとしながらも、一抹の寂しさを感じる。冬は近い。標高が上がると気温は下がり、下肢の筋肉は冷えからくるけいれんが起きやすくなる。あちこちで筋肉を活性化するエアースプレーが活躍し、体をケアする姿は立派なアスリートの集団である。



清水百太郎氏の貴重な座学に聞き入る参加者の皆さん

い霧の中、わずかに見え隠れする小太郎尾根と西風の冷たさが高山の稜線を感じさせる。足元に目を向ければウラシマツツジが盛んに色づいている。一面の真っ赤なじゅうたんもやはりガスの中。途中の岩場も三点支持で乗越え、雨よりも早く肩ノ小屋へ着いた。受付のピークはこれからだという。ひよつとすると健脚の集団だったのか。思ったよりゆつたりとした自由時間の後、座学研修が始まった。清水(百)氏による案内人の講話に、疲れきっているはずの参加者の目が輝く。「青木久次郎が私欲を捨てて案内人組合をまとめたから、今の登山ブームがあるんだよ」「山小屋の修理にやーツイタテからゴヨーネを通過してヒロカールへいっとうだよ」「野呂川の岩魚なんか釣つとうこたーねーしろつとどうが柳の枝に糸を着けてなげりやーかかり、なげりやーかかり」

「うちじやあ昔養蚕だったから毎日うちにいる者の方が都合がよかつたから案内人になれたのではなかつたかな」「ヒキダシの古い箱を開けてみたら磁石がへえつてたから、きつとこれなんかを使って案内しただと思ふよ」一生懸命語り部を務める背中を見ていると、胸が熱くなり頭の下がる想いだ。

「雪田」に着くと一人に膝のテーピングが必要になった。スタッフがザックを背負い、リタイヤさすまいと登高を助ける。その甲斐あつて小太郎分岐には予定より早く着く。しかし雨は無いものの真っ白

やりとりの最後は、ペットを山岳地域に持前ページより 次ページへ

ち込むのは是非かの論議が盛り上がり、和やかなうちに座学は終わった。この高山にもかかわらず、このスペースと環境を整えてくれた肩ノ小屋の配慮にも感謝したい。雨は夜半まで降り続いていたようだった。



霧の山頂ではあったが満足そうな顔と顔

スケジュール通り、朝五時に小屋を後にして山頂に出発する。風は強く、まだ周囲は暗く、多分何にも見えないであろう山頂にひたすら向う。「四〇年来の夢」という高齢者も混ざっている。今回行けなければもう後は無いとのこと。夢をかなえてください、是非ともに。山頂の記念写真はそれぞれの満足そうな顔をうつすら霧のベールが覆っていた。小屋での朝食もそこに念願かなった北岳を後にする。途中で緩んだ膝に不甲

斐無さを感じ、思うようにならない自分の足を恨めしく思いながら、それでもみんなへの迷惑を気にしながら頑張ったオールドラグーマンがいた。「One for All, All for One」この精神は山でも確かに生きていた。

芦安ファンクラブ 清水記

早速芦安ファンクラブHP 掲示板にいただいたH・Iさんのメッセージです。

「登山教室お疲れさまでした。久々に訪れた広河原：昔もの私はマイカー規制の計画を知った時もうフラッと気軽に行くことが出来ないんだなあ…と一抹の寂しさが。と、同時にその後の南アルプスはどうなるのかと不安に思っただけです。が、その後の様子を今回目の当たりにし、少しは安心する事が出来ました。今秋も生憎の天気。稜線は一面の白い世界でしたが流れる霧の中、ウラシマツツジの紅がいつそう鮮やかに映りました。先達のお話やアルプスの原状等々、盛り沢山の座学や皆さんとの語らいに楽しいひとときを過ごすことが出来ました。スタップや関係者の皆様、ありがとうございました。」

南アルプスの玄関口であ

朗報 南アルプス市に山岳救助組織が生まれそうだ!

芦安地区には、山岳救助活動を専門に行なう組織はなく、遭難事故発生時には、警察や山小屋関係者、山岳愛好家、旧芦安村職員等が急きよ編成されて救助や捜索活動を行ってきた。さらに県や県警のヘリコプターが出動し空からの救助活動を展開している。

昨年四月に南アルプス市に合併してからは芦安支所に勤務する市職員の減少や基幹職員の配置替救助隊の編成が困難な状況

この程、南アルプス市では登山者の高齢化などで増える傾向にある山岳遭難に南アルプス署に協力して、救助、捜索及び事故防止活動等に於ける山岳救助隊を結成することになった。隊員は、二十五名程度で各部署から山岳経験者及び条件内の希望者で編成し十一月中旬頃結団式を行なう予定である。今後、警察署との合同訓練などを実施し、相互の連携をとり、有事の際に備える。北岳を中心とした南アルプスでは、毎年十件程度の事故が発生しており、その活躍が期待される。南アルプス市では「山の魅力を伝えるだけでなく、万全の態勢を整えて登山客を迎えたい」としている。

芦安ファンクラブ 青木記

昨年(平成十五年)夏山シーズン事故例の一部

(山梨県警山岳情報より)

発生日時	発生場所	事故及び遭難者	原因及び状態
8月 1日(金) 14:00 頃	南アルプス 仙丈ヶ岳	山梨県 男性(20 歳)	二人で登山中、バランスを崩し足を踏み抜いたもの(重傷)
8月2日(土) 9:50 頃	南アルプス 北岳	神奈川県 男性(44 歳)	「八本歯の科尔」付近を登山中、高山病にかかったもの(軽傷)
8月5日(火) 14:00 頃	南アルプス 北岳	神奈川県 男性(75 歳)	「八本歯の科尔」付近を登山中、足を滑らせ転倒(軽傷)
8月7日(木) 17:30 頃	南アルプス 北岳	神奈川県 女性(55 歳)	山頂付近を登山中、浮き石に足を滑らせ転倒(軽傷)

高峰北岳

〔芦安中夏季施設に思う〕

芦安中学校教頭 遠藤 久

「できればもう登りたくない」
これが、芦安中学校の夏季施設の下見を終えての率直な気持ちだった。

芦安中学校へ赴任してしばらくたつて、北岳について職員の中で時々話題になった。「非常に大変な山」「体力づくりをしておかないと登れない」「装備をそろえなくてはいけない」など聞くにつけ、八ヶ岳には登ったことがあるのだから、それほど違いはないだろうと思いつつも、とりあえず「装備」だけは、帽子を除き頭の前から足の先まで揃えた。また、たまたま家にあつた登山の本を読んで「登山は体力二割、技術八割」という部分を見て、それほど体力づくりをしなくてもなんとかなるだろうとたかをくくりながら「下見」の時期が近づいてきた。

下見当日。広河原に到着したあと、広河原山荘からの道は今まで経験したような比較的ダラダラとした道だったので、初めのうちはそれほど大変ではなかったが、しばらくすると足を大きく上げて高さをかせぐような道になってきた。普段なら休憩時にタバコを一服というところだが、吸う気にさえならない。しばらく歩くと足がつかない。一度だけでなく二俣までの道で何度かつかない。そのたびサロンプラスを吹きかけたり、ふくらはぎをもんだりしながら歩きはじめるのだが、少し歩を進めるとまたつかるといふ繰り返しでどんどんと遅れをとり、指導の准一さんを初め、一緒に登った人たちに大変迷惑をかけるが、約七時間後にやっと肩の小屋に着した。

下見当日。広河原に到着したあと、広河原山荘からの道は今まで経験したような比較的ダラダラとした道だったので、初めのうちはそれほど大変ではなかったが、しばらくすると足を大きく上げて高さをかせぐような道になってきた。普段なら休憩時にタバコを一服というところだが、吸う気にさえならない。しばらく歩くと足がつかない。一度だけでなく二俣までの道で何度かつかない。そのたびサロンプラスを吹きかけたり、ふくらはぎをもんだりしながら歩きはじめるのだが、少し歩を進めるとまたつかるといふ繰り返しでどんどんと遅れをとり、指導の准一さんを初め、一緒に登った人たちに大変迷惑をかけるが、約七時間後にやっと肩の小屋に着した。



北岳山頂で「北岳に負けるな！」

翌日の早朝、山頂での三六〇度の展望は爽快で、下山も快調だったが、後半今度はひざが笑って、体力も不足、技術もない自分がなさけない」ということから、冒頭の「登りたくない」という弱音が出てしまった。「なさけない」は、途中ですれ違う人たちの年齢層が思ったより高く、中高年、中でも高年の人たちがさほど大変そうではなく登ったり下りたりしているのに、まだ年齢を比べれば若い自分がかんざまでいるのが兎に角なさけなく感じた。

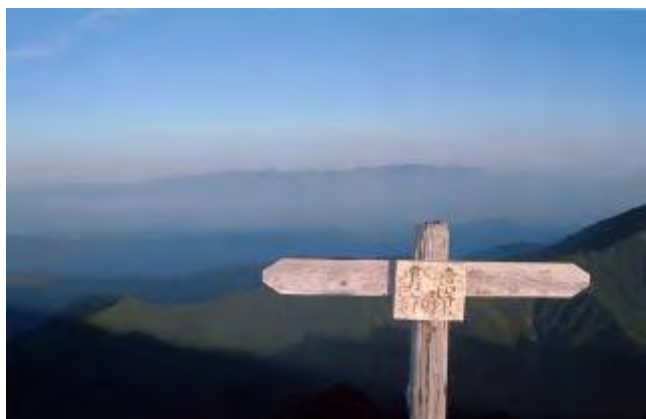
2週間後の本番。下見の後の気持ちが多少薄らいではいたものの、「またあんなさまだつたらどうしよう」という気持ちで臨んだ登山は、われわれのグループが最後列であったことと一度経験している余裕(?)のためか、休憩時のタバコも吸うことができたし、多少は花をながめる余裕もあった(二俣の上の登りはやはりきつかったが)。しかし、今回の登山では、山はすぐ表情を変えることを知った。下見の2日間は、その時期には珍しいほどよく晴れていたのだが、今回は小太郎尾根分岐から肩の小屋に向かう道になったところで霧が出てきて、下からの強風も重なり、それまで汗をかきかき登ってきたのがうそのように寒くなってきた。そうなる少し歩くと立ち止まりまた歩くと立ち止まるというように急に体力が落ちてくるのを感じた。「山の天気は変わりやすい」というが、二回目の北岳でそれが実感できた。

生徒たちはというと、ほとんどの生徒が平然と登っていく。登山靴を履いている生徒もいるが、普段はいていない運動靴にジャージ姿。これが年齢の差というものか。元気であった。

来年度の芦安中の夏季施設は「仙丈岳」登山になるようである。今度は花や景色を余裕をもって眺めたり、山の苦しきよりも「楽しさ」を感じたい。そのためには、普段の体力づくりが必要になるだろう。来年度の七月を待たずに、体力づくりを進めよう。今はそう思っている……。



お花畑の中を登る中学生隊



「中央アルプス遠望」下見の北岳山頂より 撮影遠藤氏

南アルプス市一周年記念観光キャンペーン錦色に 染まる「白鳳溪谷・夜叉神峠」で実施！

南アルプス市は一周年記念秋の観光キャンペーンを10月初旬から11月中旬まで紅葉の白鳳溪谷・夜叉神峠で実施する。観光関係のエージェントによる事前調査及び検討会で決定された今回のコース設定は山岳観光を前面に押し出し、文字通り南アルプス市の象徴を広く内外に知らしめると共に今後の南アルプス市観光体制構築へ向けての第一歩を踏み出したことになる。コースは白鳳溪谷の紅葉遊覧→温泉→特産物めぐりのバスコースと、秋色に染まった夜叉神峠ハイキング白根三山展望→温泉→特産物めぐりバスコースの2コースになっている。

特に夜叉神ハイキングには芦安ファンクラブの会員が各パーティ毎に付添いながら、コースに見られる樹木や植物等の解説、一昔前の山里の生活をうかがわせる炭焼き窯等の説明、峠から眺める白根三山他の山座同定などを地元ならではのガイドぶりが楽しみだ。せっかくのこの機会に南アルプス市の観光拠点めぐりを楽しんでみてはいかがでしょうか。